転生したら捨てられたが、拾われて楽しく生きています。❷

トロ猫
Toroneko

Regina BUNKO



ミリー

本作の主人公。
快適な異世界生活のため、
魔法チートを生かしつつ
数多のレシピを再発明中。
相変わらず美味しいものに
目がない。

マリッサ

ジョーと共に
『木陰の猫亭』を営む
ミリーの養母。
第二子のジークも生まれ、
猫亭の仕事に
子育てに大忙し。

ミカエル

エンリケの部下で今回、
ミリーの菓子店オーブンの
手伝いをする。
可愛いものが大好きで、
特にマカロンを偏愛中。

エンリケ

東商業ギルドの
ギルド長でマリッサの祖父。
抜け目のない商人で
ミリーの才能を見抜く。
マリッサを溺愛している。

ジョー

マリッサと共に
『木陰の猫亭』を営む
ミリーの養父。快活な性格で
家族思い。ミリーと共に
レシピ開発に勤しむ。

ジーク

ジョーとマリッサの間に
生まれたミリーの弟。
姉のミリー同様、
美味しいものに目がない。

ロイ

アズール商会の若き会頭。
ミーナとは昔馴染みで上司。
王太子・レオナルドとも交流があり、
ある密命を受けるが……？

ミーナ

魔力探知能力に優れる、
ロイの優秀な部下。
ロイの問題発言に
冷静にツッコミを入れる様は
夫婦漫才と言われる。

登場人物紹介

目次

転生したら捨てられたが、拾われて楽しく生きています。2 7

書き下ろし番外編
商業ギルドと糸電話 369

転生したら捨てられたが、
拾われて楽しく生きています。2

変わりゆく日常

【木陰の猫亭】がリニューアルオープンして一週間が経った。

猫亭での仕事は以前とは変わらないのだが、食堂が広くなった事でお客さんも増えた。

ランチ時は厨房と食堂を中心に忙しくお手伝い。一緒に働くネイトの妹のケイトはさすが満腹亭というブラックな食堂で働いていただけあり、客捌きだけでなく要領もいい。ネイトたち――スミス家のきょうだいは優秀だ。ちなみにスミスとはネイトたちの名字だ。

忙しかったランチの時間が終了し、後片付けを終え全員が席に着くと、ジョーが今日の従業員用のランチをテーブルに並べる。

「みんな、お疲れ。さぁ、遠慮せずに食え食え」

今日のランチはササミチーズフライ定食とブルのシチュー定食だった。従業員はどちらも食べる事ができるから得だ。

お腹がペコペコだった全員が一斉に大皿に載った料理を取り分け口に運ぶ。

みんなが食べる姿を笑顔で眺めながらジョーがケイトに声をかける。

「どうだ、仕事は慣れたか？」

「はい、旦那さん。ここは働きやすく、お客さんはみんな優しいです」

「そうか、それは良かった。それで、今後は夜のシフトにも入ってほしい。代わりにもう明日から朝は入らなくて大丈夫だ」

「分かりました。旦那さん」

朝食は一種類のみで、トレーを運んでお金を受け取るだけの作業だ。朝は、主に宿の利用客ばかりだから朝食の注文数もランチに比べれば少ないのでケイトが朝のシフトから抜けても大丈夫だろう。

「僕もお手伝いしたいです」

静かに一緒にランチを食べていたマルクがジョーを見上げ言う。

「お？　マルク、急にどうしたんだ？」

「ミリーちゃんも五歳からお手伝いしてると聞きました。僕もお手伝いさせてください」

「うーん。俺は構わんが、お前の兄ちゃんには話したのか？」

「それは、まだ……」
「兄ちゃんと話し合ってからまた聞きに来い」
ジョーがマルクの頭を撫でながら宥めるように言い、隣にいるケイトもマルクを説得する。
「そうだよ、マルク。今夜にでもお兄ちゃんと話しよ。ね？」
マルクが分かったと返事をしながら小さく頷く。
最近やたらと仕事の話を尋ねてくると思ったら……そんな事を考えていたんだね。
まぁ、家業のある家のお手伝いは五歳からみんなしている。そうでなくとも家事や洗濯の手伝いは幼い頃からみんなしているし、マルクもそれを見ているから、手伝いの申し出をしたのだろう。

夕食の仕込みの手伝いを終わらせマリッサとジークの世話を交代。マルクに勉強を教えながらジークをあやす。ジークはハイハイを始めてからプクプクだったボディが少しスマートになった。活発になった分、もう少し食事の量を増やしたほうがいいのかな？
行動範囲も以前よりうんと広がった。どこでもつかまり立ちをしようとしたり、なんにでも突進したりするようにもなった。手の力が強くなった事でなんでも握り、口の中

に入れたりしようとするので目が離せなくなった。保護リュックを背負っているので後ろに転んでも大丈夫なのだが――
「うんぎゃあああ！」
ジークが顔から床へダイブしてオデコをぶつけ叫ぶ。
あー、今日もやっちゃったか。一度泣き出したらしばらくは止まらない。大粒の涙で泣くジークをあやす。
「ジーク、痛いの痛いの飛んでけー」
こっそりとジークのオデコにヒールをかける。急に痛さが消えたジークがキョトンとした顔でこちらを見上げる。
「あう。あむ。あー」
訳したら、なんでだ！　痛くないぞ！　と言っているようだ。
ジークはまだ言葉を話す事はできないが、人差し指を唇に当てジークに囁く。
「ジーク、内緒だよ。ねぇねとの約束ね」
「あぅあ」

◆

今日は商業ギルドを訪れる。レシピ登録を始めて十か月経った。
登録販売したレシピの売れ行きは順調だ。お金は以前よりも貯まっているだろうと思う。商会に関する事はジョーがやってくれているので詳細までは分からない。
ケチャップはオークカツを購入した中央街の同じ店が販売契約を済ませたそうだ。
ぐへへ。
ジョーとマリッサはレシピのお金はミリーが使いなさいと手をつけない。私も利益を使って投資とか商売をして成り上がるぜ！　みたいな野望など今はないので、とりあえずお金は貯めている。それに……税金も結構高く前世のような所得控除などは存在しないらしい。
お金もあるので、いつか砂糖は買いに行く予定だけどね。
砂糖の事を考えながらぐふふとニヤつく。
「お主、何をニヤついておるのだ」
ギルド長の爺さんが呆れながら尋ねる。

「お菓子について考えておりました」
「……そうであるか。フェイトはどうであった？」
「天にものぼれる味でした」
絵を描く前金として爺さんにもらった、フェイトという金平糖のようなお菓子を思い出し再びニヤニヤと笑う。
「くく。それほどに気に入ったか。して、肖像画の件は覚えておるな？」
「はい。大丈夫ですよ。ちゃんと約束は守ります」
「うむ。可能なら今週中にでも描いてほしいのだが……マリスたちから画師がお主と分からんようにするやり方をまだ決めていない」
私だと分からないようにか。向こうからは見えないが私からは見える環境……
丁度いい覗き部屋があるのを思い出し思わず、あっと声を上げてしまう。
「ん？　なんだ？」
「うーん。一応、方法が一つだけあるのはあるんですけど……」
「ほお？　方法とは？　言ってみろ」
「第二応接室ですよ」
「あそこがどうした？」

これは、覗き部屋の件は知らない感じなのかな？　まぁ、私も別にあそこを秘密にしても何も得はないので爺さんに教えるのは問題ないのだが……

「教えてもいいんですけど、怒らないと約束してください」

爺さんが訝しげな顔をしながらこちらを睨む。怖いって！

「うむ……分かった。怒らないと約束する」

「本当ですよ？」

「二言はない」

爺さんの顔が怖いので念のためにもう一度聞いておく。

「……本当ですか？」

「しつこいぞ。怒らないから早く言え」

本当かな？　やや不安だが、爺さんを例の裏側へと行ける歪みのある壁へと連れていく。

――が、歪みまで身長が足りず手が届かない。

飛ぶ魔法は使えないので、爺さんをジィっと見上げる。爺さんに頼むか。

「なんだ、その顔は？」

「私を抱き上げてください」

爺さんは一瞬躊躇したが、仕方ないなと私の両脇を持ち上げる。

「これでいいのか？」

「ありがとうございます。でも、もう少し右です」

「ここか？」

「はい。えーと、今から押される感覚がありますが、私を落とさないでくださいね」

「ああ。ん？　押される感覚？」

壁の仕組みがどのような原理か分からないので説明しようがない。クルンを感じれば爺さんも分かるだろう。壁紙の歪みを押すと、壁は以前と同じようにクルンと回って私たちを反対側、壁の裏へと運んだ。

初めて地面に転がらずこの仕掛けを通る事ができ感動する。

爺さんが私を持ち上げていた手に力を込めながら尋ねる。

「こ、ここはどこだ？」

「下ろしてください」

ジタバタと暴れたので床へポイされる。

ライトを唱え、奥の部屋へと案内しようとしたら爺さんが焦ったようにやや大声で怒鳴る。

「おい！　ここはどこだ？」
「えーと。壁の裏側ですかね？」
「裏側？　隠し通路か！　お主はいつからこの事を知っておったのだ⁉」
ライトで下から照らされた爺さんの顔がもうホラーでしかない。
「怒らないと約束したじゃないですか！」
「うむ……怒ってはおらん。びっくりしただけだ。で、ここがなんだというのだ？」
「こちらです。見たら理解すると思います」
爺さんを第二応接室が見える、シガールームと私が勝手に呼んでいる部屋へと案内する。
こちらからのみ見えるマジックミラーに映る応接室には人がいて、契約書が取り交わされているようだった。
爺さんが驚愕の表情で鏡に映る応接室を眺める。
「こ、これは……。ここは第二応接室か？　この位置なら壁にある絵が魔道具なのか」
「そうなんです。偶然見つけて私もびっくりしました。声は聞こえないんですけどね」
「防音と魔力漏れを防ぐ魔法が各部屋に施してあるからな。だが、これが壁の一部で監視用の魔道具なら防音の魔法を施す意味はないな」

「魔力は防げていないですよ。この前、魔法を使用した時に応接室の人に気づかれましたから」
爺さんがゆっくりと振り向きジト目を向けてくる。
「いつ？　誰にだ？」
「アズール商会のお姉さんがギルド長とお話をしていた時です」
「ああ、あの時か。それで、ミーナ嬢は不自然に壁の絵の話を持ちだしたのか。彼女は魔力の感知能力に長けていると聞くからな」
爺さんが何やら鏡の端でもぞもぞとしだす。
「そんなに魔力に鋭いのですか？」
「まぁ、他よりも敏感という話だ。うむ……これはやはり魔道具だな。このような大きなものは久しく見ていなかったが」
爺さんが私の見落としていた鏡の端の内側にあるスイッチを押すと、第二応接間の声がシガールームにも聞こえ始めた。
「これは、完全に覗き部屋ですね」
「このようなものがあるとは前のギルド長は一言も言っておらんかったぞ」
「知らなかったという可能性もありますよ。そこの壁に地図や名前が書いてあるんです

が、古くてインクが擦れているし、虫食いにもあってます」
「ああ。これか、よく見えんな」
爺さんが地図のある壁に向かいライトを唱えかざしたが、出ているのは豆電球ほどの灯りだ。ぼんやりとしか見えない。
「デカライト」
ライト十個分のオリジナル魔法デカライトを唱えると、爺さんが驚いて一歩下がる。
「なんだ、それは……」
「よく見えるでしょ？　デカライトです」
デカライトのおかげで地図のある壁はよく見えるようになった。応接室にいる人たちはアズール商会のお姉さんとは違い、特に魔法には気づいていない。
「『デカライトです』ではないわい。お主の魔力はどうなっておるのだ」
「秘密です」
爺さんがため息をつきながら壁にある名前の確認を始める。
「これはまた随分と古いな。読めない箇所も多いが、このエグモント・カレラは商業ギルドを建てた人物だ」
「この覗き部屋も当初からあったんですかね？」

「覗き……うむ、可能性は高い。しかしこれならばクリスに知られず肖像画が描けるな」
爺さんがニヤっと笑いながら私に視線を移す。私も、もちろんそのつもりで爺さんをこのシガールーム改め覗き部屋に連れてきた。けれど、ここで作業となると問題がある。
「まぁ、まずは掃除ですね。絵を描く間、ここに滞在するなら綺麗にしたいです」
「ふむ。しかしあまり人を入れたくないな。覗き見をしているなどと他言されたらギルドの信用にも関わる。そうだな、お主は掃除が得意であったろう？」
清々しい笑顔を向ける爺さんを見上げ、作り笑いをしながら返事をする。
「ワカリマシタ」
結局、私が立候補（？）し、覗き部屋でクリーンを連発。無事掃除が完了した。
爺さんのひ孫のクリスは魔力が高いので、念のためにライトなどの魔法は使わない事にした。ランプの魔道具などを爺さんが準備しているうちに肖像画を描く日になった。
第二応接室で爺さんがマリスとクリスに画師を紹介するのを覗き部屋から眺める。
「こちらが画師の先生だ。姿を見せたり会話をしたりするのを好まない御仁であるので、そのようにくれぐれも頼む」
画師に扮するのは爺さんの秘書のミカエルさんだ。真っ黒のフードマントに全身を包

み、白い仮面を被っている。どう見ても怪しい人。

ミカエルさん、こんな事までさせられて……ちゃんと特別手当とかもらっているのかな？

「よ、よろしくお願いします。私はローズレッタ商会のマリスと申します。こちらが息子のクリスです」

マリスが画師の異様な姿に困惑しながらも丁寧に挨拶をしながらクリスを紹介したが、クリスはマリスの手を振り払い、前回と同様の生意気な態度をとる。

「触んな」

「クリス、じっと座っている事くらいできるだろう。画師の先生が描き終わるまで大人しく座っていればお前の欲しい情報をやる約束を忘れるな。これは取引だ。いいな？」

「……分かってる」

何かしら親子で取引をしたのだろうか。商人の一家らしい。

爺さんとマリスが退室すると、クリスはマジックミラーの近くに座り、ミカエルさんは絵を描くふりをしてスタンバイする。

「先生、本日はよろしくお願いいたします」

急にクリスが立ち上がりミカエルさんに一礼する。

（あれ？　クリスって爺さんや父親以外は礼儀正しいの？）

いや、コイツは私のクッキーを盗み食いした奴だ。とにかく今は絵に集中しよう。

しばらく絵を描く事に集中していたら、予想より早く肖像画が仕上がった。

（これは、一番の出来じゃない？　いい感じに仕上がった）

マリッサたちの絵を描いた時より綺麗に描けたのは、紙や鉛筆の質も関係しているのかな？　これなら爺さんも満足するだろう。

クリスは黙っていれば美少年だ。肖像画はお見合い用だと聞いている。この美少年っぷりだったら相手の女の子もうっとりだね。

しかし十一歳でお見合いとは。この国でも早いほうだと思う。東区の住人では非常識だといわれる年齢だが富裕層や貴族はまた事情が違うのかもしれない。前世の私は二十代の終わりに初めてお見合いパーティに参加した。ケーキの有名店を貸し切って行われると聞き、それにつられて参加。ケーキを食べていたらいつの間にかパーティは終わってた。後日友達に「お前はケーキバイキングに行ったのか⁉」と叱られたのが懐かしい。

「できたか？」

約束の時間になり爺さんが覗き部屋にやってくる。マリスには別件の仕事を押し付けたという。息子には反抗的な態度をとられ、祖父には仕事を押し付けられるマリスに少

しだけ同情した。
「はい。よい仕上がりだと思いますが、どうですか？」
「上出来だ。素晴らしい。クリスの奴も黙っていれば良い顔立ちをしておるな。計画通りにクリスが第二応接室を退室したら、絵をミカエルに渡せ」
「了解であります！　隊長！」
手を上げ元気に答える。
爺さんが、第二応接室に向かいクリスを呼びだそうとするが、言い合いになる。
「あーあ。また喧嘩してる」
あの二人、実は似た者同士？　ギャーギャーと喧嘩をしながら第二応接室から二人が退室する。
フー、やれやれとひと息つきクルンと壁を回し床に転げる。
「ミリー様！　大丈夫ですか？」
どこからともなく出てきて転んだ私をミカエルさんが抱き起こす。
「大丈夫です。ミカエルさんこちらが絵です。よろしくお願いします」
「本当にミリー様が描かれていたのですね。素晴らしい絵です。ありがとうございます」

「いえ、ミカエルさんこそ大変ですね」
「仕事なので……」
――違うと思います！
マリスはクリスの肖像画を見て大変喜び、私は代金として小金貨五枚をもらった。私、この世界で画師として生活が成り立つんじゃない？
帰りにギルドの入り口でマリスとクリスを見かける。ジョーはすぐに二人に気づいたが、何も言わずに私を抱っこして早足でギルドを出た。

◆

リンゴ狩りじゃあああ。
またリンゴの美味しい季節がやってきた。マイクの父親のゴードンさんに連れられ森へと来ている。
「ミリー、今日こそ俺が勝つからな」
マイクが途中で拾った棒を振り回しながら宣言する。

「是非とも頑張ってくれ、少年」
「くっ。今回は蔓を使うのはなしだからな」
前回、私が蔓を使ってリンゴ狩り勝負に勝った事を未だに根に持っているようだ。
「マイク君はついに普通に勝負しても勝てないと気づいた？　まぁ、今回は蔓はナシとします」
「うるせぇよ」
マイクがプンスカ怒りながら前を歩く。今回は蔓を使う予定ではなかったので問題はない。
早速、リンゴの木を発見したマイクが走り出し、我先と実を摘み勝ち誇った表情で声を上げる。
「ミリー見ろよ！　もう五個取ったぞ」
おうおう……下からあんなに引っ張って。リンゴってのはね、下から引っ張っても取れにくいんだよ。上にあげないとね。
風魔法で固定したリンゴを棒で捻りあげるとなんの抵抗もなく収穫する事ができた。コツを掴めば次々と楽に採れる。風魔法を使ってるけど……マイクも土魔法で踏み台を出してるしね。これくらい、いいよね？

さて、採れたリンゴは去年より三個多い二十八個。今年のリンゴはどれもサイズが去年よりも大きい感じがする。それでも北部から仕入れているだろう果物屋で売られているリンゴよりも一回り小さい。今年は柘榴（ざくろ）が見つかりそうにないし、リンゴが多くても持ち帰れそう。
「ミリー、二十五個だ。どうだ？」
「もうちょっとで賞だね。こっちは二十八個だよ」
「三個差かよ！　でも、前より近づいてきてるからな」
マイクは悔しそうに私の籠（かご）を見たが、三個という小差に少し誇らしげだ。
「うんうん。そのうちに抜かされそうだわ」
リンゴ勝負が終了した後、ローズマリーやセージなどのハーブ類も発見したので籠に入れる。そろそろ帰ろうかという時に魔物避けの鈴の音が鳴り響いた。
「マイク！　ミリーちゃん！　魔物かもしれないから下がれ」
ゴードンさんが声を押し殺し私たちを背に隠す。茂みからガサガサと何かが動く音がして緊張が走ったが、現れたのは立派な角を持った鹿だった。鹿はジッとこちらを見てすぐに走り去っていった。魔物じゃないよね？

「ゴードンさん、あれは普通の鹿なの？」
「そうだね。鹿にはできるだけ害を与えないようにしないといけないんだよ」
「そうなの？」
「そうだ。バルティ様の化身かもしれないからね」
ああ、そうだった。バルティ様が地上に堕ちて鹿となり未だにこの世界を彷徨（さまよ）っているという設定だったね。互いに害を与えない存在ならばそれでいい。
帰り道にグミの木を発見したのでマイクと大興奮でその熟した実をいくつか口に入れ、残りを袋に入れる。アキグミなのか熟していない実は渋く、マイクがいくつか間違えて食べ、ペッと地面に吐き出していた。前世でもグミの実は田舎の子供のおやつだったね。

無事に森から帰宅。マイクたちと別れ元気よくただいまと声を上げ猫亭に入ると、カウンターにいたマリッサに出迎えられる。
「ミリー、おかえりなさい。あらあら、こんなにたくさんリンゴを採ってきたの？　食べ切れるかしら？」
「お母さん、そんな心配はしなくても大丈夫だよ。絶対、全部食べられるよ。リンゴチップスにもできるしね」

「食いしん坊ね」
厨房に向かいジョーにも帰宅の声をかける。
「お父さーん。帰ったよ。今年はリンゴが二十八個も採れたよ。あと、ローズマリーとセージとグミの実があったから料理に必要ならいくつか取っていいよ。それと、今回はいつものパイとはちょっと違うリンゴのデザートが作りたいの」
「お？　そうなのか。分かった。じゃあ、後で一緒に作るか」
「うん」
今回はリンゴで作りたい菓子がある。タルトタタンだ。砂糖なしでもできるんだが……今、私の猫の財布には小金貨が五枚入っている。肖像画の代金だ。これを使って砂糖を購入したい。
クリスの絵を描いた事は爺さん、ミカエルさんと三人の秘密だ。なので、ジョーとマリッサにはお金を持っている事はまだ言えていない。レシピのお金もあるのだけれど……ジョーがいないと引き出しできないだろうしね。さて、どう誤魔化そうかな。
（とにかく、早く使うか貯めるかしたい）
子供用の猫財布に日本円で五十万ものお金が入ってると思うと気が気でない。猫の財布は首からぶら下げているのだが、一日に何度もお金がちゃんと入っているかを確認し

てしまう。
「ミリーちゃん、おかえり！」
四階の部屋に戻ると、ジークを抱っこしたマルクが嬉しそうに出迎えてくれる。
「マルク、ジーク、ただいま。今日の食堂は忙しかった？」
「朝はそうでもなかったかな。でも昼は忙しかった。僕は片付けだけだったけどちょっと疲れちゃったかな」
そう、マルクもついに猫亭でお手伝いを始めた。今は週二回だけのシフトだがそのおかげで私は今日、朝から森へ行く事ができた。
「今日は、リンゴを二十八個も採ったから後でお父さんにパイを作ってくれるようお願いしたよ。それから、これはおやつに食べて。グミって実だよ。熟しているのは美味しいから」
袋から一番熟したグミの実を出してマルクに数粒分ける。
「わーい。ありがとう！　パイも楽しみ！」
「あーあー」
「んー。ジークにはグミの実はまだちょっと早いかな。後でアップルソースを作ってあげるから、今は我慢してね」

夕方までジークの世話をしてマルクに勉強を教えた。マルクには四則計算を徐々に教え始めてもいいかなと思ってる。来年からと考えていたが、マルクは頭が良くスルスルとなんでも知識を吸収するので大丈夫だろう。
「マルクも食堂で働き始めたし、そろそろ計算のお勉強をしようか？」
「本当⁉　お兄ちゃん、計算が苦手だから僕が勉強して教えてあげたいんだ」
マルクがキラキラとした目を向けてくる。確かにネイトは計算が不得意なので、食堂では夜の配膳を手伝うに留まっていた。
「あうーあー」
ジークが大きな声を上げ椅子を掴みながら自分の存在をアピールする。
「ジークにはまだ計算は早いよ。でも、そろそろ本格的につかまり立ちしそうだね。ジークも成長してるよ。このこの～」
プニプニと頬をつつくとキャッキャとジークが喜ぶ。
爺さんは何をモタモタしてるんだか。早く会わないとジークがどんどん成長してしまうよ。もういっその事今度、商業ギルドにジークを連れていこうかな？

◆

数日後、前日にジョーと共に作った砂糖なしタルトタタンを大皿に載せひっくり返すとリンゴの宝石が現れた。

「これは見栄えもいいが、普段のパイとは違う生地部分がいいな。タルトだったか？ミリー、よく考えついたな」

ジョーに褒められ、エヘヘと笑うが、これは前世のタタン姉妹が考えたパイの一種のタルトタタンだ。考えたというよりも失敗の副産物だ。でも、確かに美味しい。もちろん、砂糖を使ったほうがもっと美味しくはなるだろうけど、ジョー特製のタルト生地と焼き加減がいいのかもしれない。

「お父さん、また腕をあげたんじゃない？　凄く美味しいよ」

「おう！　ありがとうな」

ジョーが照れながらランチの準備に戻る。

「今日もランチは忙しくなりそうだね」

「ありがたい事だな。今日は、トマトソースパスタとオークカツだ。ミリーも手伝ってくれるか？」

「もちろん！」

今日はオークカツの日か！　オークカツは週三回ほど、ランチの時に提供している猫亭の看板料理だ。オークカツ……何年食べても飽きない。オークカツソースもリピーターの客なら必ずつけるほどのアイテムになっている。

ランチの時間になると次々と客が入る。ケイトの活躍がなければ少人数で店を回すのは無理だったと思う。今日はケイトと私、それから片付け要員のマルクが働いているがとても忙しい。

ランチの忙しさが徐々に収まり、そろそろ終了かなとテーブルを片付けていたら表に二人のお客さんの影が見えた。

「いらっしゃい……ませ」

（げっ。クリスじゃん）

なんで、ここに来ているの？　西区の住人だよね？　クリスに私の顔は割れていないから大丈夫だけど、マリッサに会いに来たのかな。クリスの隣には少し年上の従者っぽい青年もいる。

「お二人様ですか？　奥の席が空いておりますので、そちらにお座りください」

「ありがとう」
クリスが今まで見た事もない爽やかな笑顔で返事をして従者と共に奥の席へと座ったので、注文を取りに行く。
「本日はパスタ料理のブルのトマトソースパスタかオークカツになります。いかがなさいますか？」
「オークカツとは中央街の店に出てる人気のメニューと同じものなのか？」
二人が若干訝しげに互いに視線を交わす。二人とも、ここがオリジナルなんだからね！　と叫びたい気持ちを抑え笑顔で返答する。
「中央街にもあるのですね。こちらでも大変人気ですよ」
「ふむ。それでは、そのオークカツとトマトソースパスタをお願いする」
「小銅貨一枚でオークカツソースがつきますがいかがなさいますか？」
「ソースか。いいな。お願いする」
「かしこまりました。お水はセルフサービスとなっておりますのでよろしくお願いします」
クリスは爺さんたちの前とは別人のようだ。普通に話をする限り礼儀正しい子なんだけどなぁ。爺さんとのやり取りを見てるから生意気な子供という印象が強い。

注文の料理をマルクと共に運ぶ。トレーはまだ一度に一つしか運べないのだ。
「お待たせいたしました。こちらトマトソースパスタとオークカツ、それからソースですね。ごゆっくりお召し上がりください」
「クリス様、美味しそうですね。早く食べましょう」
クリスの従者の青年が目を輝かせて人懐っこい笑顔でトマトソースパスタを頬張る。
クリスもオークカツをソースにつけ口に入れ数回咀嚼して目を見開いた。
「ああ。確かに美味しい。このソースもよく合っている。中央街のより美味しいのではないかと思う」
（気が合うね。私も家のオークカツが一番だと思ってるから）
料理へのお褒めの言葉はありがたい。
残っていたランチのお客さんが帰り、食堂はクリスたちだけとなった。空になったクリスたちの皿を下げながら食事の感想を尋ねる。
「とても美味しかったよ。それでなんだが……」
クリスが何か言い掛けてやめる。なんだろう？　従者に大丈夫だと宥められながら再びクリスの口が開く。
「あの、こちらにマリッサという方がいると聞いたのだが……」

「はい。この宿の女将さんですよ」
「そうなのか……今日は、店にいるのだろうか？」
やはりマリッサに会いに来たのか。クリスはマリッサの甥だとは知っているが、建前の質問をする。
「女将さんとはお知り合いですか？」
「えっと、昔お世話になったというか……あの、会う事は可能だろうか？」
「本人に聞いてきますね。少々お待ちください」
今、マリッサは四階にいるから、とりあえずジョーだな。
「お父さん、あそこのお客さんがお母さんに会いたいって言ってるよ」
「どこだ？　あれは……そうか、分かった。マリッサを呼んでくるから待っていてもらってくれ」
ジョーに呼ばれ、下りてきたマリッサの姿が見えるとクリスは泣き出しそうな顔をした。いや、すでに泣いてるな。
「マリッサ母さん。お久しぶりです」
「まあまあ。クリス、こんなに大きくなっても相変わらず泣き虫なのね。ふふ。でも母さんじゃなくてマリッサ叔母さんよ」

泣きながらクリスがマリッサの手を取り、頭を振る。
「いいえ、マリッサ母さんです」
マリッサは少し困った顔でクリスの頭を撫でる。
「マリッサ母さんがどこに行ったのか誰も教えてくれず、何年も会えず寂しかった」
「……そうだったのね。私もごめんなさいね。急に別れてから何年も会えなくて。でもね、ちゃんとマリッサ叔母さんって呼んでね。ここに来ている事は兄さんには伝えているの？」
マリスの話になるとクリスは少しムスッとした。
「マリッサ母さんのせいじゃない。それにあの人からここの場所を聞き出したから、行く事は知っていると思う」
ちゃんと両親と仲良くしているのかという質問を否定するかのように、クリスはマリッサから視線を逸らした。
「相変わらず頑固な子ね。でも、本当に成長したわね。会いに来てくれて嬉しいわ」
「マリッサ母さんは相変わらずお綺麗ですね」
「もう、お世辞まで言えるようになったのね」
クリス、頑固な性格もマリッサを気遣うところも本当に爺さんに似ているな。道理で

爺さんとクリスは互いが気に食わないんだ。結局は似た者同士なんだよね。
　二人は少し立ち話をしたが、やがてリンゴのデザートの話になると、クリスたちにタルトタタンを出してもいいかマリッサが私に尋ねた。
「もちろん。準備するよ。お茶も用意するからゆっくり座って話をするといいよ」
　ジョーにタルトタタンを切ってもらい、お客様用の紅茶を準備する。ジョーは心配そうにクリスの話がなんだったか尋ねてきたが、会いに来ただけみたいだと答えると安心した表情を見せた。
「そんなに心配しないといけない事なの？」
「そんな事はない。俺も後でクリスに挨拶するよ」
　タルトタタンと紅茶の載ったトレーを運び三人の座る席に向かう。
「リンゴのタルトです」
「これは珍しい形だ。包まれてないパイは初めて見るものです」
　クリスが商人の顔をしてまじまじとタルトタタンを観察する横で、マリッサが私の紹介をする。
「この子は私の娘のミリーよ。この子が森で採ってきたリンゴをジョーが焼いたのよ」
「この子が例の……初めまして。クリス・ローズレッタです。こちらは従者のニコラス



です」

例の……と言い掛けた次の言葉が気にはなったけど、挨拶を返す。

「初めまして。ミリアナ・スパークです。お母さん、せっかくだからジークも紹介する？」

「そうね。そうしましょう」

家族を紹介するのならジークを仲間はずれにはできない。四階にいるジークを迎えに行く。

ジークは最近はなかなか重たくなってきたので風魔法で抱え階段を下りる。テーブルではマリッサとクリスが楽しそうに談笑をしている。今の、穏やかな笑顔のクリスがあのギルドで騒いでたお猿さんと同一人物とはとても思えない。

爺さんやご両親との不和は簡単には解決されそうもない問題のようだし、マリッサとジョーとその両親も然り……人間関係は複雑だ。

「ミリー、戻ってきたわね。クリス、この子が息子のジークよ。もうすぐ九か月なの」

「あうあうぅー」

「ジークの従兄弟のクリスですよー。ミリーも座ってお話をしたらどうかしら？」

数年ぶりに再会した二人にはもっと積もる話もあるだろうからと、同席を遠慮する。

「私はまだ片付けとかあるから厨房に戻るよ。ジークのお気に入りの積み木だけ渡しておくね」

「そう？　分かったわ」

マリッサとクリスはその後も、会えなかった日々を埋めるかのように話し込んだ。途中、ジョーも挨拶に向かった。ジョーとクリスは互いに顔見知りらしく、普通に会話しているように見えたが、時折見せるクリスのマリッサへの表情は本当に爺さんと瓜二つだった。ジョーへのツン度まで爺さんと一緒じゃなければいいけれど。

クリスたちの帰る時間になり、全員で二人を見送る事になった。

「マリッサ母さん。また会いに来てもいいでしょうか？」

「ちゃんと許可を取ってからだったらいつでもいらっしゃい」

「……はい。分かりました」

クリスと従者が店を出た後もしばらくマリッサは入り口を見つめていた。

ジョーは、ボソッと「本当に似てきたな」と独り言を漏らしながら厨房へと向かった。

誰に似たかとは言わなかったが、私もジョーと同意見だ。

◆

十の月になった。外は秋晴れで天気のいい日が続いている。こういう日はネイトが庭や屋上にシーツをよく干している。

そうそう、猫亭には広くはないが屋上がある。けれど、屋上には柵がないので子供の立ち入りは禁止されている。柵がないって……いざとなれば魔法で飛べるけど、普通に怖い。

ネイトは、干場が庭だけで足りない時には屋上も使うらしい。屋上から入る事のできる屋根裏部屋があると聞いたのでいつか探索する予定。

今月からマルクに計算を教えているが、これが考えていたより難しかった。自分には当たり前な事を他人に一から教えるのがこんなに難しいとは……とりあえず、今はマルクには数字を覚えてもらっている。計算の概念を理解したらドリルでも作るかな。

「ミリー、ランチが終わったらまた商業ギルドに行くぞ」

「なんだか日課みたいになってきてるね」

最近はレシピ登録のために頻繁に商業ギルドを訪れている。

「登録したいレシピが多いしな。仕方ない事だが、一つ一つ審査されるから登録に時間がかかるんだよな」

「今日は、ジークもつれていっちゃダメ？」

「そうだなぁ。離乳食になったが、どうだろうな。二、三時間ならいいがそれ以上になるかもしれないからな。もうちょっと大きくなってからがいいだろ」

「そうだよね。分かった」

爺さんに早くジークを披露したいという姉バカが出てしまった。ジョーの言っている事が正論だ。まだ、ジークに長時間の外出は無理だ。

準備をして商業ギルドに向かう。

商業ギルドに到着すると、ジョーはレシピ登録へ、私はいつもの爺さんの執務室に通される。

「来おったか」

「呼ばれて登場！　ミリーちゃんです」

「ついにおかしくなったか」

「……失礼な」

爺さんがフッと笑いながら黒い箱を棚から出す。

「今日はクッキーではない別のものがある。それでも食って大人しくしておけ」
箱を開けると四角型の白と茶色の菓子が出てくる。
（こ、これはヌガーか！）
白と茶色のヌガーを両方取り一口ずつ食べる。
白は胡桃（くるみ）、それからドライフルーツ。茶色はアーモンドが散りばめられ蜂蜜で固められている。もう一口ずつ食べる。ああ、至福。
「リー……ミ……おい！　ミリー！」
突然爺さんの顔がアップで目の前に出てくる。
「はっ！　なんですか？」
「いや、お主が十数分同じ体勢のまま固まっておったからな」
「そ、そうでしたか。あまりの美味しさに魂が抜けそうになりました。これほどの砂糖と蜂蜜……凄いお値段がついているんじゃないでしょうか？」
爺さんが口角をきゅっと上げ尋ねる。
「知りたいか？」
「い、いいえ。美味しく食べたいです」
「うむ。マリッサやジークの分まで食うでないぞ」

これだけあればちゃんと……いや、この美味しさ、はたして残せるのだろうか？
「お母さんはいいですけど、ジークはまだ離乳食を少し前に始めたばかりですし、蜂蜜は赤ちゃんには害なのでダメです。ジークが大きくなったら一緒にギルド長におねだりにでも来ます」
「蜂蜜がか？　お主の登録レシピにもそう書いておったな。そんな話、誰に聞いたんだ？」
この国では蜂蜜はまだまだ高価なものだ。それだけに乳児ボツリヌス症にかかった事例がないのか少ないのだろうか？　それとも白魔法で治療できるのだろうか？　どちらであろうと私のレシピで乳児を危険にさらすつもりはない。
「えーと。誰だったか覚えていないです。ヌガーの残りは包んでお母さんにあげますね。ギルド長ありがとうございます」
さっさとマリッサの話題にすり替える。これ以上、爺さんに蜂蜜の事を聞かれても答えられない。
「マリッサも甘いものが好きだからの」
だらしなくデレッと笑った爺さんの顔がクリスと重なる。やっぱり似てる。
「それで、忍者さ――見張りの方から私の伝言は届きましたか？」

「うむ。受け取った。だが、私から会いに行くと色々面倒が起こるかもしれん。しかし、お主は本当になんなのだ。あれの隠密状態に気づいた者などほとんどいないぞ」
「気づいたわけではないですよ。予想をしただけです。それにしても、いつもあのストーカーを猫亭につけているのですか？」
「すとーかー？　見張りの事か？　いや、いつもではない。たまにだ」
何をドヤ顔して言ってんだ、この爺さんは。でも、たまにならこの前のクリス来訪の時は張り込んでいなかったのかな？　爺さんもその事については聞いてこないし。
爺さんの執務机に山盛りの書類の数枚がはらりと床へと落ちる。今日は書類が一段と高い。
「今日は、いつもよりお仕事が忙しいのですね」
「ああ。十の月は祭りがあるからな。中央街は特に盛り上がるのだが、その出店許可証やらなんやらで今は書類が多くてかなわん」
「お祭りですか？」
この国にも出店をやるお祭りがあるの？　東区でも祭りはあるが何故かジョーに行く事を禁止されている。解せぬ。
「ああ。そういえばお主とは去年の今頃はまだ知り合いではなかったの。他の区でも祭

りはあるだろう？」
「東区の噴水辺りでこの時期祭りがあるって話は聞きましたけど……お父さんには子供が行くのは禁止だと言われたので」
爺さんが咳をするように笑って言う。
「ジョーの奴も過保護だな。まぁ、祭りは王都以外からも人が集まって変なのが紛れ込んでおるかもしれんからの。それに平民の祭りはお見合いも兼ねておる」
ああ。道理でジョーが「ミリーは祭りに一生行かなくていいからな」なんて言ったんだね。
爺さんが説明するには中央街の祭りは商店の祭りで、たくさんの露店や屋台が並び、国内外から商人が訪れるという。
「なんだ？　参加したいのか？」
「屋台ですか？」
「いや、祭りを案内してやろうと思ったのだが……出店も悪くないな。レシピもたくさんあるのだ。これを機にペーパーダミー商会を少し売り出したらどうだ？」
ん？　あ、そうだった。適当につけたから忘れそうになってたが、レシピを登録してる私の商会の名はペーパーダミーだった。

「お父さんのレシピですから、お父さんに聞いてください」
「数々のレシピにはお主が絡んでおるだろう？　ジョーは料理上手じゃが……今までそんなそぶりは全くなかった。あんなおかしなほどの量のレシピが突然出るはずない。あそこで異質なものといえばお主だけだ」
（異質って……）
「ペーパーダミー商会と私たちの関わりがバレそうな事はしたくないです。商会を別に作った意味がなくなるじゃないですか」
爺さんに軽く抗議すると人を雇えばいいだろとすぐに諭される。そんなお金……あ、お金はあるのか。んー。でもやっぱり私一人では判断できない。爺さんにはジョーが会頭なのでそちらに聞いてくれと返事をしたが、耳を疑うような事実を告げられる。
「ふっ。ジョーは会頭ではないぞ」
「え？」
「会頭はお主だ。ジョーもすでに了承しておるぞ」
本日二回目の爺さんのドヤ顔が披露される。私が会頭って……え？
「本人は一切聞いていないですけど」
「言っておらんかったからの」

楽しそうに、してやったりと笑う爺さんは実に大人気ない。ジョーもジョーだ。二人ともどういうつもりなのだろうか？
「……そうですか。五歳児でも会頭として登録する事が可能だったのですね」
「ジョーは、お主の将来のためだと言っておったぞ。私もどうせお主がレシピを考案しとるんじゃろうと踏んでおったからな。反対はせんかったよ。他の商会でもそうやって暖簾（のれん）分けする時があるからの。会頭に年齢制限もない」
どうやら現在ペーパーダミー商会では、私が会頭でジョーは従業員として登録されているようだ。あれ？　それならジョーは商会の口座からお金を引き出せないはずだ。
「お父さんは新品トイレの費用をどうやって出したのですか？」
「商会からの金は引き出していないはずだ。ジョーたちが自費で払ったのじゃろ。して、どうするのだ？　祭りには参加するのか？」
くぅぅ。ジョーめ。ブラック食堂の満腹亭から賠償金の金貨二枚はもらったけれど、改装にかかった費用は金貨七枚だった。そのうち、新品トイレの費用は金貨四枚にものぼる。
ジョーたちが金貨五枚自腹を切ったって事か。私が新品トイレを欲しがったから。それなら中古でも良かっ……嫌だ。ダメ。そんなの考えただけで寒気がする。

「今、商会にはどれくらいお金が貯まっているのですか？」
爺さんが隣の部屋にいたミカエルさんに商会の残金を調べるよう指示を出す。
「それでしたら、本日報告のため確認しました。金貨二十枚、小金貨三枚、銀貨五枚に銅貨五枚がペーパーダミー商会の残高でございます」
「は？　えーと？　金貨二十枚と聞こえました」
「はい、そうです」
ミカエルさんが再び残高を繰り返す中、頭の中で前世の金額に換算する。
――二千万？
いつの間にそんなに大金になっているんだ？　前に聞いた時は金貨三枚とか言ってなかった？
困惑した表情で考え込む私にミカエルさんが丁寧に説明を添えてくれる。
「ケチャップですね。あれを登録した後、売買数が一気に増えました。ペーパーダミー商会は何も広告を出していないのにこの売れ行きは凄いです。オークカツの契約をした中央街のお店が続けてケチャップも契約。そのお店がどうやら広告塔になっているみたいですね。今月もケチャップはバンバン売れてますよ。オークカツも連動するように売れています」

ケチャップは小金貨一枚、銀貨五枚でレシピを販売している。蜂蜜の使用で材料費が高い分、裕福な人にパラパラと売れればいいかと安易に考えての高額設定だったが……すでに五十回以上売れているらしい。もちろん蜂蜜を乳児に与えないという注意書きはきちんとしてもらっている。
この国のレシピというのは各家秘伝で、他の者に見返りなく伝授する事はない。欲しいなら買えというスタンスらしい。なんでそんな事になっているのだろう？　分からないけれど、道理で食材が豊富なのに出回っている食事の種類が少ないわけだ。
「して、出店の件はどうする？」
爺さんが髭を触りながら尋ねる。
「もう宣伝とかしなくていいんじゃないんですかね？　普通に売れているみたいですから」
「何を言っている。売り込める時に売らないなど商人ではないぞ！」
鼻息荒く爺さんに説教されるが……私、商人じゃないし。
（あれ？　商会の会頭だから……一応商人になるのか？）
猫亭のレシピを守るためでもあった登録だけど、小銭稼ぎで良かったのに意図せず事が大きくなってる気がする。爺さんとミカエルさんは二人とも商人だからか？　こちら

をギラギラとした目で見ながら無言の圧力をかけてくる。
「わ、分かりました。お父さんにも相談してから最終的にどうするか決めますけどね」
「そうかそうか」
爺さんとミカエルさんが嬉しそうに頷く。なんだか二人の思惑通りに進んでいる気がするけど、祭り自体は楽しみである。
「祭りはいつ開催されるのですか？」
「祭りは三週間後だ。登録は私が済ませておく。中央街に店舗を持たぬ商会は基本露店か屋台だ。商業ギルドで屋台の貸し出しもしておる。すでに登録しておるレシピから一、二品、加えてまだ公開していないものを一品くらい出したらいいだろう。ただ、問題は屋台の料理人だな。あと三週間しかないからの」
爺さんはきっと一から料理をさせる事を想定しているのだろう。
「それなら大丈夫です。先に作り置きできるものを猫亭でお父さんと準備して、屋台では仕上げるだけで済むようにします。屋台での調理係と売り子は雇います」
「うむ。それなら間に合うな。それから商会の独自のロゴマークを決めたほうが良いぞ。どこの商会から買ったか分かるようにな。お主だけでは不安だな。ミカエルをつける。頼んだぞ、ミカエル」

「かしこまりました。ミリー様、絶対に成功させましょう！」
ミカエルさんが振り向き、やる気に満ちた表情で私の手を取り微笑む。
「はい。ガンバリマス」
「くく。まぁ、ペーパーダミー商会のお披露目と思えばいいだろう」
爺さんもミカエルさんも何故か私より楽しみにしている感じがするのだけれど。
「あ、そうでした！」
爺さんに相談したい事があったのを思い出す。
「なんだ？　急に大声を出しおって」
「えーと、肖像画で小金貨五枚頂いたのはいいのですが、使えなくて困っています。使えば、お父さんたちにお金の出所を聞かれるので……」
爺さんとミカエルさんが互いに視線を交わす。二人にもこの事は盲点だったようだ。
「それは、見逃していたな。ふむ、何か買いたいものがあるのか？」
「買いたいものもあるのですが、大金をいつまでも持ち歩くのが辛いです」
猫さん財布を開け小金貨五枚を爺さんに見せる。
「心配せんでも、そんな貧相な子供財布の中に誰も小金貨五枚が入ってるなど思わないわい」

立ち読みサンプルはここまで